

薬学部

| | | | |
|----|-------|-------|--------|
| I | 研究の水準 | | 研究 5-2 |
| II | 質の向上度 | | 研究 5-4 |

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における総論文数は580件となっており、教員一人当たり約10件の原著論文を公表している。また、インパクトファクター（IF）が5以上の学術誌に76件が掲載され、教員一人当たり1.3件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業の採択率は44%から56%の間を推移しており、教員一人当たりの平均金額は約132万円となっている。また、共同研究や受託研究等の外部資金は、平均1億1,760万円となっている。

以上の状況等及び薬学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に物理系薬学の細目において卓越した研究成果がある。また、日本薬学会賞をはじめ、学部全体で41件の受賞があるほか、第2期中期目標期間に海外の大学や研究機関等と37件の国際共同研究を行い、37件の原著論文として発表するなど、薬化学と薬剤学・薬理学分野で国内の中心的な研究拠点となっている。
- 卓越した研究業績として、物理系薬学の「精神遅滞関連タンパク質の立体構造に関する研究」があり、精神遅滞の原因タンパク質PQBP1とスプライシング因子U5-15kDの複合体構造を決定し、PQBP1のC末端領域に存在するYxxPxxVLモチーフがU5-15kDの疎水性ポケットに結合していることを明らかにし、IFが10以上の国際的な学術雑誌に研究論文が掲載されている。
- 特徴的な研究業績として、機能物性化学の「新奇蛍光プローブの開発に関する研究」があり、新奇なバイオプローブ用色素として期待できる環境非応答型円偏光発光分子を開発している。

以上の状況等及び薬学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、薬学部の専任教員数は59名となっている。

学術面では、提出された研究業績14件（延べ28件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は6割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間の教員一人当たりの原著論文数は約10件で、IFが5以上の学術誌に1.3件を発表している。
- 国内外の学会発表数は、平成21年度の332件から平成27年度の364件となっている。
- 共同研究や受託研究等の外部資金の受入金額は、平成21年度の約1億3,200万円から平成27年度の約2億円となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に海外の大学や研究機関等と37件の国際共同研究を行い、その成果の一部を37件の原著論文として発表している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。